

韓国におけるゲーリー・スナイダーに関する研究は、20 世紀後半にかけ世界中で、環境汚染の危険性の世論の認識が高まるにともなって発達してきている。1980 年代後半、自由や民主主義に対する人々の熱望はある程度達成されたが、やむことのない発展や進歩を求める経済政策によって、空前の環境の零落状態がもたらされている。キム・ウォンイルの「タシギの上の瞑想」やチョウ・セフィの『小人が小さなボールを発射する』は、急速な産業化の結果の惨憺たる風景を生々しく描き出している。1991 年の洛東江へのフェノール漏れは、生態系の大災害がどれほどすさまじく、致命的なものであるかを明らかに示すものであり、韓国の環境運動の歴史において転換点となったものである。一般世論は、経済成長至上の進歩主義者の考えが、我々の生存に不可欠な自然を犠牲にしていたと最終的に認識するに至った。政策や社会運動の分野において、自由と民主主義に向かって突き進むことにより、環境保護運動自体が変化してきている。したがって、政策的なイデオロギー論争は台頭してきた生態学的な言説に移行したのである。

スナイダーは、1970 年代、英文学者のリー・ヨングルとチョウ・サンキュによって初めて韓国に紹介された。しかし、彼が熱心に紹介され、研究されたのは社会の全域で環境問題への関心が急速に高まった 1990 年代においてであった。リー教授は、1973 年の *Poetic Literature* に「ゲーリー・スナイダーとジェームズ・ディッキー」を発表し、そこで、スナイダーの「仕事のあとで」、「マリン庵」、「ベリー祭り」の3つの詩に注目している。「ビートムーブメントの終わり、環境への関心——ジャック・ケルアック、アレン・ギンズバーク、ゲーリー・スナイダーの心とともに」において、チョウは三人の作家を研究することによりビートムーブメントの生態学的な転換点を考察している。1995 年出版の *Journal for English Language and Literature* に掲載されたキム・ウォンチャンの「自然との性交:ゲーリー・スナイダーの生態学的ヴィジョン」は、スナイダーを生態学的な視点において初めて研究した学術論文と見なされている。論文のタイトルが示すように、キムはスナイダーを、生態学的な視点をもつ詩人と定義し、『神話と本文』の精読を通して生態学的なヴィジョンを論及している。生態学的なアプローチをどのようにして文学作品の分析に適用させるかを示すことにより、この論文はアメリカだけでなく、韓国のエコ詩人の研究を促進するものとなった。

韓国教育研究サービス(KERIS)の研究情報提供システム(RISS)のデータベースによれば、ゲーリー・スナイダーについて、今までのところ、およそ35の論文が出版されている。そのほとんどが学術誌に掲載されているなかで、文学雑誌に掲載されたものもあり、韓国においては、スナイダーが研究者だけでなく、詩人や一般読者にとって広く知られていることを示唆する。この他に、2つの博士論文、10の修士論文が書かれている。スナイダーの選詩集が2冊、エッセー集2冊もまた、韓国語に翻訳された。翻訳家で詩人のカン・オグクは、スナイダーの『ノーネイチャー』から76編を選び、韓国語に翻訳した。セオ・カンモク教授は、スナイダーの59編の詩を翻訳し、2005年、『この現在の瞬間』というタイトルで出版した。スナイダーの『野生の実践』と『空間における場所』はリー・サングァ教授によって翻訳され、2000年と2005年にそれぞれ出版された。わずか10年以内で、スナイダーに関する出版数の増加したことは、説明する必要がないほど顕著である。この事実は、ウェンデル・ベリーや別のエコ詩人と比較すると、より明白である。最も知名度のある環境雑誌の一つである、*Green Criticism* において、たびたび紹介されていたベリーでさえ、彼の小説は一冊、エッセーは3冊が翻訳されているにとどまる。要するに、ゲーリー・スナイダーは、韓国においてエコ詩人と同義語であり、H.D.ソローの流れをくむ最も有名な環境作家のなかに位置づけられるのである。

リュウ・チャンヘオンは、博士論文、『ゲーリー・スナイダーの詩的世界—禅詩の研究』(啓明大学校 1996年)において、スナイダーの禅詩の特徴を二つに分類している。直接的に禅の考えを唱道する禅思想的な詩と、間接的に禅の考えを表現している禅味詩であり、スナイダーが両方の詩を書いていることを述べている。ヤン・オークスクは、2003年の博士論文、『スナイダーの自然詩—生態学的な居住に向けて』(韓国大学校)において、生態学的詩人としてのスナイダーの全側面を研究した。この論文において優れているのは、生態地域主義の視点からスナイダーを理解しようと努めていることである。「スナイダーの自然詩」、「生態学的な想像力の研究」、「人間と自然の調和」、「日常生活の回復」、「スナイダーの生態詩学の研究」、「理想的な共同体・・・」というタイトルが示しているように、上記が生態学的な視点からスナイダーにアプローチしているものである。

韓国の学術誌に掲載された論文の大部分において、スナイダーはエコクリティカルな視点から研究されている。しかし、本稿において、議論を便宜的に行うために、6つのカテゴリーに分類したいと思う。1) 東洋思想の視点をもつスナイダー詩の研究(特に仏教的な視点)、2) スナイダーの自然と生態学的な詩の研究、3) スナイダーと韓国のエコ詩人たちの比較考察、4) スナイダーと他のアメリカの環境作家との比較考察、5) スナイダーへの現代批評理論に基づくアプローチ、6) この他の多方面の研究

スナイダーは、カリフォルニア大学バークレー校東アジア言語学部の大学院で学び、日本で10年以上も仏教の修行をしたので、彼の詩における仏教の影響はよく知られている。この事実を手がかりにして、韓国の研究者はスナイダーの詩と仏教の関係を研究している。学者の一つグループは、禅詩とスナイダーの関係を研究している。その他は、スナイダーの詩における仏教徒の生態学的な思考を研究している。ヤン・オークスクは、第一番目のグループであることを表明しており、彼の

「ゲーリー・スナイダーの禅仏教と禅詩を理解する」では、スナイダーが禅仏教を、西洋文明、特に最近の環境危機をもたらしている物質主義的文明を批評するための手法として利用していることを論じている。リュウ・チャンヒェオンとは異なって、スナイダーの禅詩は禅的な考えに基づく詩というよりはむしろ、禅味の詩により近いもので、自然との直接的な接触を通して自然との究極な同一を追求していると主張する。キム・ウォンチャンの『自然との性交—ゲーリー・スナイダーの生態学的なヴィジョン』とジュン・ハエセオンの『スナイダーの詩における相互依存的な生と禅仏教』は、第二グループにおける二つの最も優れた論文である。キムは、インドラ網に特徴的な、すべてのものの相互関連、相互浸透という仏教的な考えは、スナイダーのヴィジョンを示し、仏の慈悲の中で苦しむ地球を癒そうとしていると論じている。ジュンは、スナイダーの『奥地』、『神話と本文』をとりあげ、スナイダーがものごとの内側に入り、内側から物事を見、したがって、人間と自然、主体と客体という二元論はもはや存在しない「二物なし」(不二)の状態に到達しているとして主張する。

スナイダーの自然詩と生態学的な詩の研究の第二のカテゴリーに含まれるのは、チョイ・ピオンフィオンの「ゲーリー・スナイダーの自然詩とエコクリティシズム」、キム・エウンセオンの「ゲーリー・スナイダーの初期作品を読む—二元的な境界から新しいパラダイムへ」、ヤン・オクスクの「スナイダーの詩と生態地域主義」とキム・ウォンチャンの「自然との性交—ゲーリー・スナイダーの生態学的なヴィジョン」である。『神話と本文』の緻密な分析によって、キム・ウォンチャンは、スナイダーの生態学的なヴィジョンには、仏教と道家の教え、アメリカ原住民の知恵があると、それらはスナイダーに人間中心主義から我々を解放し、全生命の共同体の一員と見なす方法を与えていると論じている。スナイダーの生態学的なヴィジョンは、人間が対立する自然に勝利し、自然と性交をするという生態学的なエロスにおいて絶頂に到達すると論じている。類似した文脈で、キム・エウンセオンはスナイダーをディープエコロジストと定義し、スナイダーは人間と自然の二元論を克服し、そして我々の心を革新することを通して、本来の心を回復することにより、生態中心的な平等を実践に移そうと主張しているのである。

チョウ論文は、スナイダーの生態学的な詩学一般をとりあげて、全生命の相互関連性、相互依存を強調しながら、人間と自然は惑星を共有する平等な存在であるという考えに立脚すると分析する。我々が人間中心主義を克服し、自然と人間社会のバランスを確保できることを通して、モデルとしての生態地域主義をスナイダーが提示しているというチョウの論述は価値あるものである。ヤンは、『亀の島』や『斧の柄』の詩がスナイダーの生態学的地域主義の詩学をどの程度具現化しているかを詳しく論じている。スナイダーの詩学に産業社会の囲い込み開発に反対し、地域を救うための政治的要素が内包されていることをと述べている。これらの研究に加え、グ・ジャクワングの「生態学的生命へのゲーリー・スナイダーの提言の研究」は、人間と動物間の緊張や闘争の問題を扱っている。グは、スナイダーが、動物を理想化し、見下すべきでなく、我々とある距離をもちながら、彼ら独自の方法や生活状況をもつ生命共同体メンバーとして受け入れていると、書いている。シン・ウォンチュルの「ゲーリー・スナイダーの『終わりなき山河』—巡礼の叙事詩」は、同詩集についての初めてでかつ唯一の論文である。その中で、シンは、その詩はただ単に空間を放浪するのではなく、スナイダーの精神的巡礼を描き出す叙事詩であると述べている。

三つ目のカテゴリーである、韓国詩人との比較であるが、3つの論文が価値あるものである。「キム・チハとスナイダーによってとらえなおされた土着文化におけるエコ意識」では、スナイダーは、アメリカ原住民と仏教の文化においてオルタナティブな生態学的なヴィジョンを発見し、一方、キムは「ドンハ」という生活哲学において、韓国の伝統思想を見出している。チャン・ヨンヒの「ゲーリー・スナイダーとキム・チハに特別に焦点をあてた韓国とアメリカの環境詩におけるエコ意識の比較研究」は、韓国の言語学者によって書かれているという点において、いくらか特徴的である。この論文では、チャンは、双方が生活の破壊や現代文明の非人間性を鋭く批評し、人間と自然は一体であり、深いレベルで同じ存在であるという洞察を伴う新しい生活共同体を構築しようとしている。「生態学的視点から、ゲーリー・スナイダーとハンヨン・ジョンを読む」において、パク・スンチャンの他、韓国の文学研究者は、両詩人は生態学的な問題は人間が自然との関係を再構築するときだけ、解決しようとしていると主張する。

上記に取り上げた論文は、主にテーマ別の研究であるが、カン・ヨンキの「スナイダーの「水面のさざなみ」における脱構築の理念」とチョイ・ドンオの「自己と他者の生態学的相互依存性—バフチンとスナイダーの出会いの場」は、より発展的な議論となっている。デリダの脱構築とスナイダーのエコ詩学を比較すると、カンは、スナイダーが相互依存の仏教的な概念を利用しながら、同時に反エコロジカル文化を再構築していると論じている。彼は、「水面のさざなみ」の詳しい分析を通して、スナイダーがどのようにして人間と自然の二元論を越え、民主的な相互的な生命のための対話的言説を発達させているかを論証している。同様にして、チョイは、スナイダーの詩を、バフチンの自己と他者の相互依存性の概念に適用し、人間と自然との生態学的に調和的な関係を考察している。もし、バフチンの相互依存性が西洋の形而上学を脱構築し、自他の相互的な生命への謙虚さを強調するならば、スナイダーのエコ詩学は、われわれの文化的な偏見を脱神話化し、思考の二元論力関係を非難する緑の政策に立脚するものであると論じる。これに加え、キム・ウォンチャンは「生態学的文学と東洋思想—もうひとつのオリエンタリズム？」の中で、オリエンタリズムの視点からマーウィンやアモンズとスナイダーの生態学的なヴィジョンを論じている。彼は、スナイダーの生態学的なヴィジョンは、想像的対話から創り出されており、西洋的なエコロジーと東洋の仏教の地平の融合は帝国主義を浸透させるために賦与された政治的な東洋主義とは異なっているとしている。

ヨーン・ヒーソー はスナイダーと他のアメリカ詩人との関係を研究している。「ソローと現代アメリカのエコロジカル詩との関

係の研究」では、スナイダーはレヴァトフ、レトキ、アモンズ、マーウィンとともにソローの伝統の中で書いている詩人であると述べている。また、「言語的な懐疑主義と環境主義—現代アメリカ自然詩の研究」において、スナイダーは、ステューブズやリッチやアモンズとともに、言語の恣意的な抽象化に対する予防策と、自然の存在論的な自立性への敬意を示しているのであるとする。「東洋の光を探して—アメリカ現代詩における生態学的な運動」において、キム・ウオンチャンはジェファーズ、ギンズバーグ、スナイダーを道家や仏教の視点から詳しく論じている。彼は、「尊厳の相互的絶命から相互的生命へ」において、ベリーやアモンズやスナイダーを、アメリカにおけるキリスト教、科学的、東洋思想に基づく生態学的な傾向を代表している作家としてそれぞれ論述している。

これに加え、キム・エウンセオンは『寒山』における翻訳者と詩人としてのゲリー・スナイダー」のなかで、『寒山』は、単なる翻訳ではなく、スナイダーのもう一つの創作である。そして、パク・ミアエの「ゲリー・スナイダーの想像的風景」はバシユラルの夢想の詩学の視点から、スナイダーの想像力の特徴を分析したもので、特筆するに値する。

総じて、韓国におけるスナイダー研究は最近 10 年で出版物の量に関して言えば、本当に著しい増加があり、この傾向は継続していくものと思われる。学術水準を向上させるため、いくつかの要因が提言されるべきであろうと思われる。1) スナイダー研究は、これまで圧倒的にエコ詩人としての彼の役割に集中してきているので、さらなる広い多面的なアプローチが必要である。スナイダーは、アメリカ詩の伝統において、パウンド、ウィリアムズ、ジェファーズの影響、スナイダーの言語に関わる実験、他のエコ詩人との類似性、違いが将来有望なトピックである。2) スナイダーの仏教、道教との関係を調査する場合においては、無(空)依存的な因果関係、相互依存性、流れ、道、無為などのキーとなる概念を、彼の詩を分析するのに、安易に適応させるのを止めるべきである。仏教、道家、エコ仏教、エコ道教の基本的テキストの直接的、内深的な研究が必要である。3) 東洋哲学と、アメリカ原住民の思想がスナイダーの生態学的なヴィジョンの大半を構成しているため、多文化的なアプローチが不可欠である。オリエンタリズムと東洋思想盗用の問題、地方化、西洋における生態学的に再解釈された仏教と道家の再輸入について調査されるべきである。4) 今後の批評分析においては、これまで『亀の島』、『神話と本文』だけが広く研究されてきたが、『奥の國』、『波について』、『終わりなき山河』などこれまで見落とされてきた作品を分析すべきである。批評方法は、ディープ・エコロジーの他に、エコフェミニズム、現象学、多文化主義等の方法を含めて、広く多様になるべきである。このような研鑽が継続的に行われ、より深まったスナイダー研究がなされれば、他の韓国エコ詩人を研究するにおいても生産的な方法を提案するものとなるだろう。